

現代日本紀行文学全集

中部日本編

ほるぷ出版

現代日本紀行文学全集 中部日本編

監修 志賀直哉

佐藤春夫

川端康成

小林秀雄

井上靖

発行日 昭和五十一年八月一日 発行

発行所

東京都新宿区新宿二一九一三
電話 東京〇三―三五四一七〇三二(代)

株式会社 ほるぶ出版

代表 山浦喜三夫

総発売元

東京都新宿区新宿二一九一三
電話 東京〇三―三五六一六二二一(代)

株式会社 ほるぶ

代表 中森蒔人

制作 東京連合印刷株式会社

目 次

〔愛知〕

東海道五十三次 岡本かの子 3

旅日記 二葉亭四迷 17

秋風帖 柳田国男 20

海道の砂 その二 折口信夫 42

遊海島記 柳田国男 43

伊良湖の旅 吉江喬松 53

日本ライン 北原白秋 65

白帝城 北原白秋 74

〔岐阜〕

関の藤川 新村出 80

関ヶ原百里 尾崎士郎 86

飛驒の風景 滝井孝作 105

飛驒の顔 坂口安吾 113

〔長野〕

126

130

136

143

147

153

160

163

175

181

195

203

207

207

湖畔	中村草田男	273
北信早春譜	野上豊一郎	270
戸隠行	高濱虚子	266
志賀高原	三好達治	261
カヤの平	小林秀雄	257
續山峽小記	齋藤茂吉	251
豊年蟲	志賀直哉	244
烏帽子山麓の牧場	島崎藤村	241
雉子日記	堀辰雄	237
淺間山麓より	谷川徹三	232
輕井沢にて	正宗白鳥	226
信濃日記	有島武郎	219
霧ヶ峰から鷲ヶ峰へ	徳田秋聲	216
蓼科高原	片山敏彦	212

霧の旅 吉江喬松

279

〔新潟〕

日本海の波 久保田万太郎

287

彌彦山 長塚節

303

佐渡まで 尾崎紅葉

306

佐渡一巡記 柳田國男

314

佐渡ヶ島 吉井勇

324

大佐渡小佐渡 井上靖

331

親不知、子不知 深田久彌

347

〔富山〕

針ノ木峠 長谷川如是閑・河東碧梧桐

352

だいらの小屋 安倍能成

366

四月の山手帖から 浦松佐美太郎

375

富山の薬と越後の毒消し 坂口安吾

381

〔石川〕

北陸の旅 吉田絃二郎

401

北越の夏 阿部次郎

409

萬葉紀行―能登いやひめ 土屋文明

415

郷里へ來て 徳田秋聲

419

〔福井〕

栃の實 泉鏡花

425

能郷白山と溫見 桑原武夫

429

若狹道 田山花袋

433

執筆者・発表紙誌一覧

443

中
部
日
本
編

東海道五十三次

岡本 かの子

他に父が交際してゐる人も無いことはなかつたが、みな中年以上か老人であつた。その頃は「成功」などいふ言葉が特に取出されて流行し、娘たちはハイカラ髷といふ洋髪を結つてゐる時代で虫食ひの圖書遺品を漁るといふのはよく／＼向きの變つた青年に違ひなかつた。けれども父は

「近頃、珍らしい感心な青年だ」と褒めた。

主人は地方の零落した旧家の三男で、学校には就いたものの、学費の半以上は自分で都合しなければならなかつた。主人は、好きな道を役立てゝ歌舞伎の小道具方の相談相手になり、デパートの飾人形の衣裳を考証してやつたり、それ等から得る多少の報酬で学費を補つてゐた。かなり生活は苦しさうだつたが、服装はきちんとしてゐた。

「折角の学問の才を切れ端にして使ひ散らさないやうに——」

と始終忠告してゐた父が、その実意からしても死ぬ少し前、主人を養子に引取つて永年苦心の蒐集品と、助手の私を主人に譲つたのは道理である。

私が主人に連れられて東海道を始めてみたのは結婚の相談が纏まつて間もない頃である。

今まで友だち附合ひの青年を、急に夫として眺めることは少し窮屈で揶揄い気もしたが、私には前から幾分さういふ予感がないわけでもなかつた。狭い職分や交際範囲の中で同じやうな空気を呼吸して来た若い男女が、どのみち一組にな

風俗史専攻の主人が、殊に昔の旅行の風俗や習慣に興味を向けて、東海道の探査の足を踏み出したのはまだ大正も初めの一高の生徒時代だつたといふ。私はその時分のことは知らないが大学生時代の主人が屢々そこへ行くことは確に見てゐたし、一度などは私も一緒に連れて行つて貰つた。念の爲め主人と私の關係を話して置くと、私の父は幼時に維新の勿騒を越えて来たアマチュアの有職故実家であつたが、斯道に熱心で、研究の手伝ひのため一人娘の私に絵画を習はせた。私は十六七の頃にはもう濃く嚙水^{グロウ}をひいた薄美濃紙を宛てがつて絵巻物の断片を磨き写しすることも出来たし、残存の兜の鍔を、比較を間違へず写生することも出来た。だが、自分の独創で何か一枚画を描いてみようとなるとそれは出来なかつた。主人は父の邸へ出入りする唯一の青年といつてよかつた。

りさうなことは池の中の魚のやうに本能的に感じられるものである。私は照れるやうなこともなく言葉もさう改めず、この旅でも、たゞ身のまはりの世話ぐらゐは少し遠慮を除けてしてあげるくらいのものであつた。

私たちは静岡駅で夜行汽車を降りた。すぐ駅の俵を雇つて町中を曳かれて行くと、ほの／＼明けの靄の中から大きな山葵漬の看板や鯛でんぶの看板がのそつと額の上に現はれて来る。旅慣れない私はこゝろの弾む思ひがあつた。

まだ、戸の閉つてゐる二軒のあべ川餅屋の前を通ると直ぐ川瀬の音に狭霧を立てゝ安倍川が流れてゐる。轍に踏まれて躍る橋板の上を曳かれて行くと、夜行で寝不足の臉が涼しく拭はれる氣持がする。

町ともつかず村ともつかない鄙びた家並がある。こゝは重衡の東下りのとき、鎌倉で重衡に愛された遊女千手の前の生れた手越の里だといふ。重衡、斬られて後、千手は尼となつて善光寺に入り、歿したときは二十四歳。かういふ由緒を簡単に、主人は前の俵から話し送つて呉れる。さういへば山門を向き合つて隻方、名灸所と札をかけてゐる寺など何となく古雅なものに見られるやうな氣がして来た私は、氣を利かして距離を縮めてゆる／＼走つて呉れる俵の上から訊く。

「むかしの遊女はよく貞操的な恋愛をしたんですわね」

「みんなが、みんなさうでもあるまいが、——その時分に貴賓の前に出るやうな遊女になると相当生活の独立性が保てた

し、一つは年齢の若い遊女にさういふロマンスが多いですね」
「ぢや、千手もまだ重衡の薄倖な運命に同情できるみづ／＼しい情緒のある年頃だつたといふわけね」

「それにね、当時の鎌倉といふものは新興都市には違ひないが、何といつても田舎で文化に就て何かと京都にあこがれてゐる。三代の室町時代になつてもまだそんなふうだつたから、この時代の鎌倉の千手の前が都会風の洗練された若い公達に會つて參つたのだらうし、多少はさういふ公達の恋の目標にすることに自分自身誇りを感じたのぢやないでせうか」

私はもう一度、何となく手越の里を振返つた。

私と主人はかういふ情愛に関する話はお互ひの間には勿論現代の出来事を話題としても決して話したことはない。さういふことに触れるのは私たちのやうな好古家の古典的な家庭の空氣を吸つてきたものに取つて、生々しくて、或る程度の嫌味にさへ感じた。たゞ歴史の事柄を通しては、かういふ風にたまには語り合ふことはあつた。それが二人の間に幾らか温かい親しみを感じさせた。

如何にも街道といふ感じのする古木の松並木が続く。それが尽きるとばつと明るくなつて、丸い丘が幾つも在る間の開けた田畑の中の道を俵は速力を出した。小さい流れに板橋の架かつてゐる橋のたもとの右側に茶屋風の藁屋の前で俵は梶棒を卸した。

「はい。丸子へ参りました」

なるほど障子に名物とろゝ汁と書いてある。

「腹が減つたでせう。ちよつと待つてらつしやい」

さういつて主人は障子を開けて中へ入つた。

それはたぶん、四月も末か、五月に入つたとしたら、まだいくらも経たない時分と記憶する。

静岡辺は暖かいからといふので私は薄着の綿入れて写生帳とコートは手に持つてゐた。そこら辺りにやしの花が鮮に咲き、丸味のある丘には一面茶の木が鶯餅を並べたやうに萌黄の新芽で装はれ、大氣の中にまではの／＼とした匂ひを漂はしてゐた。

私たちは奥座敷といつて奈良漬色の畳にがた／＼障子の嵌つてゐる部屋で永い間、とろゝ汁が出来るのを待たされた。少し細目に開けた障子の隙間から烟を越して平凡な裏山が覗かれる。老鶯が鳴く。丸子の宿の名物とろゝ汁の店といつてももうそれを食べる人は少ないので、店はずの腰掛け飯屋になつてゐるらしく耕地測量の一行らしい器械を携へた三四名と、表に馬を繋いだ馬子とが、消し残しの朝の電燈の下で高笑ひを混へながら食事をしてゐる。

主人は私に退屈させまいとして懷から東海道分間図ふかんずを出して頁をへぐつて説明してくれたりした。地図と鳥瞰図の合の子のやうなもので、平面的に書き込んである里程や距離を胸に入れながら、自分の立つ位置から右に左に見ゆる見当のまゝ、山や神社仏閣や城が、およそその見ゆる形に側面の略

図を描いてある。勿論、改良美濃紙の複製本であつたが、原図の菱川師宣のある暢艶で素雅な趣はちり／＼味へた。しかし、自然の実感といふものは全くなかつた。

「昔の人間は必要から直接に発明したから、こんな便利で面白いものが出来たんですね。つまり観念的な理窟に義理立てしなかつたから——今でもかういふものを作つたら便利だと思ふんだが」

はじめ、かなり私の心遣ひで話しかけてゐるつもりでも、いつの間にか自分独りだけで古典思慕に入り込んだ独り言になつてゐる。好古家の学者に有り勝ちなこの癖を始終私は父に見てゐるのであまり怪しまなかつたけれども、二人で始めての旅で、殊にかういふ場所で待たされつゝあるときの相手の態度としては、寂しいものがあつた。私は氣を紛らす為めに障子を少し開けひろげた。

午前の陽は流石に眩しく美しかつた。老婢が「とろゝ汁が出来ました」と運んで来た。別に變つた作り方でもなかつたが、炊き立ての麦飯の香ばしい湯氣に神仙の土のやうな匂ひのする自然薯は落ち付いたおいしさがあつた。私は香りを消さぬやうに薬味の青海苔を撒らずに碗を重ねた。

主人は給仕をする老婢に「皆川老人は」「ふじのや連は」「齒磨き屋は」「彦七は」と妙なことを訊き出した。老婢はそれに對して、消息を知つてゐるものもあるし知らないものもあつた。話の様子では、この街道を通りつけの諸職業の旅人であ

るらしかつた。主人が「作樂井^{さくらくゐ}さんは」と訊くと、

「あら、いま、さががた、この前を通つて行かれました。あな
た等も峠へかゝられるなら、どこかでお逢ひになりませう」

と答へた。主人は

「峠へかゝるにはかゝるが、廻り道をするから——なに、そ
れに別に会ひ度いといふわけでもないし」

と話を打ち切つた。

私たちが店を出るときに、主人は私に「この東海道には東
海道人種とでも名付くべき面白い人間が沢山ゐるんですよ」
と説明を補足した。

細道の左右に叢々たる竹藪が多くなつて、やがて二つの小
峯が目近く聳え出した。天桂山に吐月峰^{とげづつ}といふのだと主人が
説明した。私の父は潔癖家で、毎朝、自分の使ふ蓆盆の灰吹
を私に掃除させるのに、灰吹の筒の口に素地の目が新しく肌
を現すまで砥石の裏に何度も水を流しては擦らせた。朝の早
い父親は、私が眠い眼を我慢して砥石で擦つて持つて行く灰
吹を、座敷に坐り煙管を膝に構へたまゝ、黙つて待つてゐる。
私は気が気でなく急いで持つて行くと、父は眉を皺めて、私
に戻す。私はまた擦り直す。その時逆にした灰吹の口に近く
指に当たるところに磨滅した烙印で吐月峰と擦してあるのがい
つも眼についた。春の陽ざしが麗らかに拡がった空のやうな
色をした竹の皮膚にのんきに据つてゐるこの意味の判らない

書体を不機嫌な私は憎らしく思つた。

灰吹の口が綺麗に擦れて父の氣に入つたときは、父は有難
うと言つてそれを蓆盆にさし込み、煙管を燻らしながら言つ
た。

「おかげでおいしい朝の煙草が一服吸へる」

父はそこで私に珍らしく微笑みかけるのであつた。

母の没したのちは男の手一つで女中や婆あやや書生を使ひ、
私を育てゝ来た父には生甲斐として考証詮索の楽しみ以外に
は無いやうに見えたが、やはり寂しいらしかつた。だが、情
愛の発露の道を知らない昔人はどうにも仕方なかつたらしい。
掃き清めた朝の座敷で幽寂閑雅な氣分に浸る。それが唯一の
自分の心を開く道で、この機会に於てのみ娘に対しても素直
な愛情を示す微笑も洩らした。私は物ごゝろついてから父を
憐れなものと思ひ出して来て、出来るだけ灰吹を綺麗に掃除
してあげることに努めた。そして灰吹に烙印してある吐月峰
といふ文字にも、何かさういつた憐れな人間の息抜きをする
意味のものが含まれてゐるのではないかと思ふやうになつた。
父は私と主人との結婚話が決まると、その日から灰吹掃除
を書生に代つてやらせた。私は物足らなく感じて「してあげ
ますわ」と言つても「まあいゝ」と言つてどうしてもやらせ
なかつた。参考の写生や縮写もやらせなくなつた。恐らく、
娘はもう養子のもものと譲つた気持ちからであらう。私は昔風
な父のあまりに律儀な意地強さにちよつと暗涙を催したので

あつた。

まはりの円味がゝつた平凡な地形に対して天柱山と吐月峰は突兀として秀でゐる。けれども瀟とか峻とかいふ峙ちやうではなく、どこまでも撫で肩の柔かい線である。この不自然さが二峰を人工の庭の山のやうに見せ、その下のところに在る藁葺の草堂諸共、一幅の絵になつて段々近づいて来る。

柴の門を入ると瀟洒とした庭があつて、寺と茶室と折衷したやうな家の入口にさびた聯がかゝつてゐる。聯の句は

幾若葉はやし初の園の竹

山桜思ふ色添ふ霞かな

主人は案内を知つてゐると見え、柴折戸を開けて中庭へ私を導き、そこから声をかけながら庵の中に入つた。一室には灰吹を造りつゝある道具や竹材が散らばつてゐるだけで人はゐなかつた。

主人は関はずに中へ通り、棚に並べてある宝物に向つて、私にこれを写生しとき給えと命じた。それは一休の持つたといふ鉄鉢と頓阿弥の作つたといふ人丸の木像であつた。

私が、矢立の筆を動かしてゐると、主人はそこに転がつてゐた出来損じの新らしい灰吹を持つて来て巻煙草を燻らしながら、ぼつ／＼話をする。

この庵の創始者の宗長は、連歌は宗祇の弟子で禅は一休に学んだといふが、連歌師としての方が有名である。もと、こ

れから三つ上の宿の島田の生れなので、晩年、斎藤加賀守の庇護を受け、京から東に移つた。そしてこゝに住みついた。庭は銀閣寺のものを小規模ながら写してあるといつた。

「室町も末になつて、乱世の間に連歌なんといふ閑文字が弄ばれたといふことも面白いことです。これが東国の武士の間に流行つたのは妙ですよ。都から連歌師が下つて来ると、最寄最寄の城から招いて連歌一座所望したいとか、発句一首ぜひとか、而もそれがあす合戦に出かける前日に城内から所望されたなどいふ連歌師の書いた旅行記がありますよ。日本人は風雅に対して何か特別の魂を持つてゐるんぢやないかな」

連歌師の中にはまた職掌を利用して京都方面から関東へのスパイや連絡係を勤めたものもあつたといふから幾分その方の用事もあつたには違ひないが、太田道灌はじめ東国の城主たちは熱心な風雅擁護者で、従つて東海道の風物はかなり連歌師の文章で当時の状況が遺されてゐると主人は語つた。

私はそれよりも宗長といふ連歌師が東国の広漠たる自然の中に下つてもなほ廃残の京都の文化を忘れ兼ね、やつとこの上方の自然に似た二つの小峰を見つけ出してその陰に小さな蝸牛のやうな生活を営んだことを考へてみた。少女の未練のやうなものを感じていぢらしかつた。で、立去り際にもう一度、銀閣寺うつしといふ庭から天柱、吐月の二峰をよく眺め上げようと思つた。

主人は新しい灰吹の中へながし、かの志の金を入れて、

工作部屋の入口の敷居に置き

「万事灰吹で間に合せて行く。これが禪とか風雅といふものかな」

と言つて笑つた。

「さあ、これからが宇津の谷峠。業平の、駿河なるうつの山辺のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり、あの昔の宇都の山ですね。登りは少し骨が折れませう。持ものはこつちへお出しなさい。持つてゝあげますから」

鉄道の隧道が通つてゐて、折柄、通りかゝつた汽車に一度現代の煙を吐きかけられた以後は、全く時代とは絶縁された峠の旧道である。左右から木立の茂つた山の崖裾の間をくねつて通つて行く道は、とき／＼梢の葉の密閉を受け、行手が小暗くなる。さういふところへ来ると空氣はひやりとして、右側に趨つてゐる瀬川の音が急に音を高めて来る。何とも知れない鳥の聲が、瀬戸物の破片を擦り合すやうな鋭い叫声を立てゝゐる。

私は芝居で見る黙阿弥作の「蕙紅葉宇都谷峠」のあの文弥殺しの場面を憶ひ起して、婚約中の男女の初旅にしては主人はあまり甘くない舞台を選んだものだと思は少し脅えながら主人のあとについて行つた。

主人はとき／＼立停まつて「これ、どきなさい」と洋傘で弾ねてゐる。大きな蓑が横腹の辺に朽葉を貼りつけて眼の先に蹲つてゐる。私は脅えの中にも主人がこの旧峠道にかゝつ

てから別人のやうに快活になつて顔も生々して来たのに氣付かないわけには行かなかつた。洋傘を振り腕を拡げて手に触れる熊笹を筆つて行く。それは少年のやうな身軽さでもあり、自分の持地に入つた園主のやうな氣儘さでもある。そしてときどき私に

「いゝでせう、東海道は」

と同感を強ひた。私は

「まあね」と答へるより仕方がなかつた。

ふと、私は古典に浸る人間には、どこかその中からロマンチックのものを求める本能があるのではあるまいかなど考えた。あんまり突如として入つた別天地に私は草臥ぶれるのも忘れて、ただせつせと主人について歩いて行くうちどのくらいたつたか、こゝが峠だといふ展望のある平地へ出て、家が二三軒ある。

「十団子も小粒になりぬ秋の風といふ許六の句にあるその十団子を、もとの辺で売つていたのだが」

主人はさう言ひながら、一軒の駄菓子ものを並べて草鞋など吊つてある店先へ私を休ませた。

私たちがおかみさんの運んで来た抹茶を飲んでゐると、古障子を開けて呉縞の羽織を着た中老の男が出て来て声をかけた。

「いゝやう、珍らしいところで逢つた」

「や、作業井さんか、まだこの辺にゐたのかね。もつとも、